五

和書門 類
一五一九八 號
二一四 函
一二 六 架

內閣文庫
和書 類
一五一九八 號
六 冊
一三八 函
四 架
(五冊)

内閣文庫		
番號	和	15198
冊數	6(	5)
函號	138	30

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

第十二

正應元年二月十五日官廳にて御即位あり　この御門は香園院の御子（伏見院）
[illegible]これの左大臣関白[illegible]の[illegible]亦基
又九条の[illegible]大臣殿（[illegible]）[illegible]の[illegible]又[illegible]殿[illegible]
[illegible]
[illegible]太上天皇みな[illegible]世[illegible]
[illegible]めづらしく[illegible]御門の御母[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

松崎文庫
浅草文庫

かくてしはしはそれ文の御かよひてうちつゝきたるをこそ
いらせおはしますに心ならねと西園寺大納言実兼の御女
いたしたてられ給ふへきよしおもしろきこゑのたつ
六月二日入内ありてその夜女御にさため申さる
御中もあはれにおほしめしたるさまにて御覚え
ありけるに後しはしはかりもあらはれけれと御心もそひ給はぬ
御かたの女御の御かたは二条殿の御内のむすめの女
御中よりかくてしものとし御心に思しめしけるにや
こゝろにもまかせぬ御ことにてあはれなるはかりなり
ふかき心さしもなきうちにおはしませは是非なき
ことなれとたゝ大宮院の御はからひにて御例のことし
おはしまして院の御所にまゐらせ給ひし又みなうちかよひて東二条
院の御方は御中あしく御覚えもなかりけるかとよ御さた御はら
よりて上臈女房十人御かた人すくれたる御供にて
さしつき上臈の女房たちにつゝみて御座のあたり
かたのほかにそ上臈女房二人は雅忠の大納言の女
大納言典侍と申しける又一人は兵部卿の女
の女二条と申してこの御かたにさふらひけるか
れ人々えらはせ給ひてあるなかにもとりわき御心
ありける女房は四条大納言隆親の女二条の女房
大納言の宰相の中納言の女大宮院に候ひし
従三位の女御の女房の宰相の中納言の女房
たれもとりとりに従の女房たちもいつれもの
けしきも御心にかなひ給ふはかりなし御心はれぬ

[illegible]

雲のうへまでめでたき人はおほくいでけり

宇治の関白も[illegible]

[illegible]

[illegible]

けたまはりしは後ことにみや御らんし二度のまちいも心ざし
かの大納言はらしやうる内のうへの后のおもひをめして
せ返る御さうらひけれは二位殿として世にいて大納
言殿となりての御中に申さたまうし縁組をさたし
もたりけるにてこそは御りやう合にあひしなてこそ
わらせ給へとも御ゆるも心ことにてわざとあくなとし
ありあけしのひてかうあとくちはのふかき二
あいのかう長かう大納言のまことにわらいせ給ふうへにはた
いまはか二位殿はたいめん女御の御一条のつかさの
めし女御の花すゝのち一ことかさねのひら殿にあ
ところ[illegible]のうへ文のかたちね二ことゝりまのから
[illegible]の御意に記あやの花はら御たゞしいてとらかし
てはかり御めし[illegible]のかうしつるいとえ[illegible]
てたゝし御まゐに後ゆへの人とて左大臣内大臣大納言
右大臣山階中納言按察使殿上人まで[illegible]ありくり[illegible]
うちちしてゝらのあるとふけしちさこつてむかしかたへ
人あつまる御まへし上下ちのやうにちさ（て）のさか内の
御方のはかたのとはしめて内侍女房ともみ丹井殿まて
あくまけまて古今のはるいて下大家のはうらんありかいさんまの
わのはつまりへとうなり[問くて]のまふて内のはうらはうらせ
殿さて東向かり女御もはうらんすゝ二位殿一条殿二条殿の
よかとしたまでたり月々（て）あやさはふらひ御所にゐて
もと上達人あやさはふらい所はとまれし中宮大夫らの
よくらせ殿のてまゐるまて御ゆめとはるかへいとまへしめ[illegible]

いかなりとて人あさき世にも女御まての御ひとへ衣はかなの
たてまつるのはうちきくらいの御こうちきら衣二重なる
あはれやのそうすゞしの御たちなはかま人皆うへけれは御
うへ御ひきなをしすゞしの御たちならひしきいる御衣
勝千重かふくろつゝらにけれるゆるへて女房も衣
しの二重かさね唐衣ゝ白しめつらしき色をもたらく
してすかしのたくはふきうへてるいる御ひくしこ所
ろいろつらしけにかなかりとくせんらひしきまて衣
御はかまつきてさいとゆかしき女の御いつれしゝかなの衣
人ちの御てし一陪なるもせん ものちの世御衣も御て
しまそくけるせあるゝ御ゆりけるよし二重衣今出川へ
まいて給ふに車のせ人しゆ給御前を御ねこの
女房中宮御はかまの通ものかほ

まことあるゆてるの陪ぞる出かゝりしにいつくとて御し
御さゝや御入内の夜の御衣帝
あてなきかゝりぬと給を御心せしれこの御はしひ給
いにしへ人も女の家来ひんきなからゆるをかなて
殿上はみなもしまたそのかうはるなでしらうしらうすの
りけ給ほ羽の御せ衣ゑ宮中ぬかりし左衛の中御門
西ものもちいののちこれて女の中そくゆ通
るゆて八月なる后にとふらひ日にてまり今出川の御方
まうて給ひて其の御式ひとられし御ちゝらに御
御ためてたくいはらぬはあれてとてのその
ともの御給ふにてそそかれどきていはれてあらぬていは

れあらく〳〵なる事にやなと后妃の御事に侍る程
まうけの君のかぎりなきは世のかたきことにめでたくて大后宮院
御時東三条院とならせ給ひてしかるに侍りて大后宮にて侍り
けるを人々やむごとなき今日は行幸のをりしもかしこくこそ
こそはへりとこそかしこくしのちのおほいぎ二あいの女院の
宮まいりて大人なかしものゝみあるはこみのかぎり
の女房ハ人ことにはなやかにさふらひ給ふとぞつきなかりし
さうらとみえ侍りしの衣みてはふるふいづれともかゝりけるに
どもさてのけなめやましこの年の十二月一日に后の宮の御
たゞたかふさり給ひぬるをみてれなかし大后宮二條殿上
しゆる太皇太后宮にてのしはさ院の御世にいかき
みて世の中はれもあはれ〳〵なりけり
は后まへ人の御ありさまはれもあはれ
りはらくうのゝし十二月に法門の御母三位殿になりあ
り朝に准后の宣旨かうふりて女御にかくて玄輝門院と申
めでたくいひしかりかりけることに久しうて三位になりて
ぬさくはめでたさ三月廿三日にて三后なり女院
観の御事なる東院にてまうりかの殿にかへりし
て院の御事なきことゆへにいとゝいのちなく
しきかのの御母さまにせさせ給ふ
日をたりせさせたまふ三月十日かしこ院
ねたがの宰相の女の御後みなれはせ給へし
てたまふにかくておもはせ給ひてかくこれ世
り中宮の御子にてまゐらせたまひけるかなし

さいはらにてそれを世にしらいはずたゞ大将殿にてなりけるに
かしこまり井の御門中納言子あまたおはしけれどもことにこの殿は
ありけり御娘をひきいれぬるいとゞいかゞ十月まで
殿の御方にてたゞのきさらぎ御殿いとゞめでたきことなき
のしましるにて殿へまいりにき三年三月宮中のこと案
重盛の御子駒犬かゝりまいらせたるいとゞうきまゐりして
此比はうちにおはしけれども御代をかりける事の
あはれへきみかどもされもおもしろいくあかりの殿右大
御門の御ゆかりそしまかりけるふたところへ上かのり
みかど九重の中へまゐせ入てもまゐりて女御につけ
のかぎりにてやとふりのをみあげたればうけたく
ねもごろしけるあひだこのあかつきのみかどきこえのまゐるいさし
なりそひての後はまいであつかるのゆる
つけ御門きこえて御門いらせたまふほどにまするとぞふ殿の御むこ
みなうちなれどいとはく北の方当殿とつ東の
まつてとそれは南殿へあかしめてあまた女御内
まかりて権大納言中納言御殿あまてふかゝる
うへは中宮の御ことにわたらせ給ひけるが対の殿への
ひてみかどの御代始めて春日殿へ女房のやうにみてはあやし
にぎやかにてこれはかたふかくてそ女御
公家の御そばにてみかどり春宮こそは中宮の御かたの
権大殿にておはしませて常盤井殿へまいりてうかゞ
あさがの心の中をばいかにとおもし二の所にてそはあき
りの御事ともかゝてかくして後の所に入給ふ

わたらせたれけるも大宮人なかし中宮の侍ひのさぶら
ひの装束けるさまどもいふかたのなまめいてをかしくれ
ことりけるを殿ばらなどかたらひてしめじめかく語らひ
二条前関白のゆかりやみやの宮と申や廿十内侍 皇后宮
りて附き侍くるみあそばすに追風ふきこえけれはにや、
まゝて四条宮と申御座の かしこきよしかたりてみ
だれ合ふ事ありしと見して殿のはらからの堂上なんの事
てあひつ后宮と申太后かつけるめのこは南殿の階
の中にそおはしまし八前に見して十九にかつける
大殿子のうへのこと聞えてよろこびのけふをあふ
くしられもはべらぬあるまじうしてかしめむしくれはか

少納言してはべりしを御のしもあふ侍従に内蔵頭
侍中まるるのもとてはしめてひ給はくそて又侍ぶ
春日殿のみ御太后宮のうへぞわれがむすめはたの中
夫のひの御前の蔵人頭あげて左衛門の陣にまかせ
たまふ春宮大夫いとこの侍中にて又左近衛権中将
せめに中宮にも春日殿へ侍給ふ御世中おほせられて
侍まゐりての御供にもかしこまりて六条にてたびたびさ
れもとのかへし三条宰相中将宰相もめしくらべ給ふ
条の家に侍ひてかまへて名やいふてまゐのあそばね
とまの中将は侍ともなれたりけるにそかのあさかりていとし
たるみでいふすこそいでさせて世の覚えもしめしたるか

とりなしも及て心うくいらしきやうなりしあはれなるは
とあはれ御覧し中宮の御せうとく経文を御覧しける法の道の人
みなひとは往生極楽の信心あらせたまへる一経
誠法の法なる人と申れしあつまりかく当代とます
たちまち法をも世をこそいとしめさせ給ふと心をかけ次
御月をかさりて世をかくしあげ給ふ人の法かたらひなか法
てありしらせまれあしめまはまさ給ふをおいそなきて
三乙院とを月ごろかうかへしかて法ら道へきよと
さありしの第六のなあしもひきらそつるしや経で
いさくさしあさ給ふしとありていかてか法きていあ
らひ遠方ななさ人いよくいあ故院の
かきは法なれは大将

かゝ法なけれは経はこゝろにくき
ひしてありと聞ゆるの給なとかひしきてなるこそあはれ
バ中の院も判法なのしれとらくいとあはれにしこきや
ふあかゝりなゑ限なくては世人出てさとりしめなかうかしさなむ
なれ法せしをこなとてあつまつ人法かやくれて堤を出つまた法
ますかゝる法て大月のちとの法かま中の院は法て
おもひせりぬるておそれなるとかりかうも経をける
顔子をやかて法ぬ経なる世なる一院の世中嫉こた
国の山は中すでみて出家しに法も思ちしますそかする
くさりなせうせもひぬるにて法ざぬ御しみたし経法
かくせりかくてむさしの法衣ふさてくさくなけをかけ
かゝで経て御はよこなてもすいへのよのよふなり法金剛院と

やゑし新院御所へちかづきまいりて色々のはかりことして
さる頼長の御方のおもきの二條殿などさたしける比左府の
こゝそあやまりなる人あるいはかくまいりてなどなげきたり
くはか御所にて人にえし中将の丈のはからひまあは
もとよりいそしあさやかなるは法師ならし久我世に源
てよせかふきいふそもとよりこれなる法名者もなく源へ
し任様るのらくへの院の人そなれたるゝふかめ忠き
こゝそ源へおもはれてさびしく心ぞそきは
あらさ又なの御とかのはからひをひ出申る人もなし源
氏のま丈の兄ふ伊なるはゝうなる人御出てしくつかし
こゝはゆうなれて七郎まるかでその事ゝふあれは同じき
将御方の御所へかゝりけるにわかくしとなりの君の兵かつけてはる
さいこの院にはしき法師のまゐてまかふらく
うれもしき源をあさらうアとてまうりちやすく
のあきるまむしあり肓てり風あらてふ御病あ
りしかに源ひらめれて神なりはちくはぬきうまれにち
しちき波なりしきゝ人もなかれたとやいてあてなし
くいおそらうおもし法にてふ法性は亀山殿に
あれふりしこゝろうり勢もしよの世生ちくたれあつら
なふ人のけはひもきこへ浪あまれなる絶の法あらむ
さて思さそまいりたまいやゝなる御宮のゆくきのゝ音
しげかりとなかあり座所は紹ひかしてす御所の中将に
おもまゝりてはかうい めくりの一二人ゝかなと申さ

はるのはなはちらせけるべしなかりしもはかなひのみ
たゞはかなくなりぬるやうにていふさくらもたゞのみしくて人々
かくさしもなれなるをまたしき世間にあはれなる庭のかた
らんにかゝりて年ごろのありさまなりけるにそへて思
みこしぬきうちふしたゝめるけしきにてこめしこと
物がたりしはていひてふけゆけはそてはしくしはべら
いとあはれなるその中にこそ御ぐしして君なきに
へなでてこ御時よりみかどの御れい御木丁ひきよせて
はなのごとくなりつかしうにほひておもしろくかほりにほひにほふ
ところはあやしやと程なくして川ら竹あけたゝれなとし
月かげのかすかにはるゝ程は月ゝなくあはれなるにこめて
かくてものをとゞめなくらんかやうにさめゆうかしこのぬる絶えはてし
けふもりゆきてまたいふやうにてさまゐりて人ぞいひにけるにこ

ゆかはまでやはりはて中将なりけりてまうでくるのを
ごやと思ひ給ひに法師もおかしうぬすみ見てあかう法師そ
かしのおもひなきかにゆきてよびよせつゝへもとおぼれ
たいしとりかへりなきこともなはなかりなかなるゆへ
かくしぬまのうきのかたらんもあさましくてさる
もらめしうふひなきゝまこをおかしうはせけてよ
よそなきはてかくなむしらしたしけるにしも
なのおきてちとそらねどゝさかりとのこゑあるのおもて
人知らぬひとつしにくいてやらせ
とりかへれもなき人ちよの
扇にかきつけてきてやうかなし

いでかでみやまさひけゝれもうけもなふの御めとまは
かしもなし侍りみしかりし院の御時に侍りふ
まなの契の程やゝおもし又そも侍らぬれけや
ましく給り侍あり侍しら末しくゝさへ思ひくおし
しくる御ゝ御所へちもきあやなふをとかしれぬへし
御家の花をいふ人々さらにきられけるなかりしので
此侍るうけしきとめ侍そそいてらしふて心けるなり
なかされなかり此そしもさてぬなかさらしみやいえ文
あされなる筆さ人すのしゝ身ひけり申て侍ふ
侍けても此世ひとつの末代かりの侍はたまさりの
御あさきを後そしはさ御中申将とくのふあ
かれにるなれぬかはとしそ侍ことなかいとれ
ならしさの御気色をやりしさなきいまど
れをさろしとてきのひて御光のことおかく人のなりなきたといひな
して申同さまりくごのふなかしゝ不てまいして心まて
またてさつる折りき侍なき侍まさら世の侍く事し侍れ
たる思び同しみあるのしけ侍りこれしこへ侍らそう
えくなるゝれきの中将侍え加しとて之侍の世の代
さの同なもてなされてき侍一両りしてさくりし有にむ
内大臣の御事
後山此所えても思ふかる
きりしめと加その事後ふ同
侍て侍の御大臣えその侍るれたさてえ道ゝのこと
へとよ右大臣さまてき侍りし中に

あはれなりしこゝろのうちのかぎりとて
おもひしりつゝもなにとおもひてなど
とりかはし給ひき　右衛門督にしかはりての世のは
くなりにし左兵衛督侍従按察使左近の大将の八条に
つれなくしておはしますに　右大臣宰相中将なと
ぐはへてこなたの人はかゝるにもかゝはらずおもひいでゝ
宰相中将の御子のせうとのおはしますに人々してあやしきことの御
おもひたまへりてぞたのみたまへりしにたゞしく
まうでたるにかゝるひさしのかたにはおはしますの御いとこ
雄のみかどのおほみこはせしたまへる勅使の御後をまかせ
おほしますの御子を東宮のくらゐにつけたてまつらんと
りてこの世のなかばかりしきみ按察使のきみにはいたく
しかれ給ふにかくしていかにおもはれたまふにかは

ゆゝしきことをおもひつゝうち思ひつゞけつゝ御心に
ならせたまへるかたはらいたきことゞもの御をり
みかど御ことおほくはいはせたまはでいまはとおもひつゝ
たゞかたらひのおほくはかゝる御けしきなどの御ことの
たかくしおほくはかたちをかしうかうして人の御かたち
いまはおはしますにこそありけめとおもひておはします
おほくたまはりてたゞむかしのことのみおもひいでつゝ
たとひこゝろにいらずとも御ことのかくてぞとおもへば
となたにもおはしますにとおもひいでゝ御ことのはかれ
せきとめかたくおぼゆるもいとゞあはれなるかな御てより
八月十五日の夜を月のおほくおもしろきにおはしまして
ゆきのまへのことをおほしめしいでゝ御とぶらひのありつるのち

哀の至極なる事なき心くのうらみ思ひしくの方に也けりさ
ほどなう此ころの御あいしやうにこそいかに御聟のさだめてかく
給ふ事もありし御父上之人なりといひしか
なりはてし給ひけり御聟は中将の君の御事なりしに
於中納言まで出世ありしに此度の事にて是をお
せて此しられあへ(?)なり身にあまりてありしに
命のうちに母上も存生にいらせ給ひ薬師の御前にて
居ぶらひなどしけるに不思議にうかびける事にて
まちゐしにけふぞ都の事なり御物語なし
くれぐれ思ひくのまゝ人なくおぼしめし御聟の
此後女房は人をはしめとして此武士と
さるへきにはしまらせ給ふことのよしをうけたまはり
たる心ちしけるに母はやけて又かくそへかりそめのたちて
ほどなく此母ちゝさいかしきるまゝ物ならで人とまり
もとにあふしてめしつかひけるにこそあれ御聟はさても女の方なかりき
ねんごろにきこゆるめのとらしきもの御物かたりしち
かくはらみ申るれとこ母いとゆぶそく思ひなげくれと
ば御座なるのかりなりし給ふて御姫君さてのちのみ世にある
かく成りしとあやまれる事もありけるにまもられて
てのせられてさうらふもきこえけることのよし姫をいれ
うちまかせていはれける人のかたりこそいとをしくくるめ
でたくぞきこえけるまゝあやしきおはしめたらせ給ふ母
ひとり御所にも此宿大殿ときこえし御母君ちゝみこの君
御聟にてまいり御前の御思ひなりしさまにせ給ふこと

総持寺とうの寺の住寺もれなかりし住侍かうべし文永の
年よりはしまりて凡四百年禅学にて天下のさためとは
則それ従へ七代日の本の兵とも三十二世ぞかはしまりつ
るまりふいくれらふ今川之ときれてかくいとあるまうきは
あさ座みてのかきりにふいてとし記しあらわれ道経
からもかけりしみずさをみやはなたし番乃そとしまけしも
こゆかにかけきものにふ寿きされうしかりきてこの利(?)
かい一院の住寺正蔵大臣公記の住女阿通殿とて僧都
ひし法侍こ當代の住持うちおそいまましうしこ今世等
くらんとかき法行よ度々なれば普行の山紀(?)をて
御やうの御堂都をせし文ととばはいあられみていはし
うらんげ宇が度住ては其のまぞなれける七人住ひし人ふの(?)
中かいさぬまの列なるくふ老きさの将軍の(?)
道もさうしくしかれがあるとてさくドそてあしかでふ
そうれそのむまかどをあるゝするにやみてハ十月廿
住久照しかふ久明の親王ときこゆるとおなじ十日範(?)やぐて
六川(?)の小さなくも文のことろかひし東へおりしてさ(?)れ
こうあつまをひとせかふ日本あるかきまゝへはゝせ川よも
住国ひとくへとて枝しき武士とうちうち住ちてまいらさ(?)
きくのとれへしの住雲に御寵あけて住らへならは
ひまそきものうらここえなて其はる年のましくえ川に
のぶとこうれそうたるもよひ乃住りうぎかなれれかいの(?)
まさびつたのさうねきなてき内りていてわれやふかな
めかしいてぬ哉の列なる衣とくさのかつきなあそげの(?)

金かねの乃緒とこそ後かいかめしくめしくしてかい雲
のうへにうつろふもまたたにふきてこそくはりまにこそたふさかい大
後夜のかねのさらつり朝つるにすすみいへし三百が朝は明だ
んとはすみ文山にかへるなかられと似かめしきるかども月
なかうちのはいめいかく文の中のえびらに同文なりと
いさいみもいへ波斉級の玉座もうくやて七宝とあるぞ
みえたるきも日月も明かやしき花をいてあれ同しき
はあらぬかたへし関の東をみやこの外とそておもふこも
つくりはずなりにふなをしき便なまこえめたちのふ
不かく給とは闇はけかはみいはよかく陰ぬをてめでた
くおぼいしくしみへくらり時なり明后とひしもまつ給ら
ねかしてや宝法之みるの座とていてはうらくなこに弁才
世のとひらうやまへ天の時をいふ吉門相殿をみなご尊かいは
御けりての名かう後ひかりし前左乃殿に俊かの月とらふ
ゆくてねうしいとかすらぶさひしくてたそ波かくそとし
くりけれは文のとしききらぎのころ一院御ぐしおろさ
くし月乃ゆ申まうみれと乃中ねひすぐしたがひはを
勝梅乃殿さいかの秋かずしはちかりふいにそねどろう
さいねかひめるみやあけりん二月十二日亀山殿にて御出
まうけさせたまふに十八日そなたら御所か御出家承實
とうまに七月の一日君は令なれどはてて又つきは内の一人の
后も御為へてらそ御るへれども文は中宮さき紅梅の十二の
御ぞふなかし色の御ひとくうれたいのうろかる事え
行の御らそぎ色ひたらめの御こうちき花山院の御から

夜かれのゝ此御の御おぼえしきさだめなきにうけそわたくし
ぞ侍しこゝ侍らねどもかはらぬ御心にて侍りけるに
てはやうまさるに向ふかりてみえたるに御まへに御匣殿
花山院内大臣師継の女ふてあいの七にくれなゐの上
へ紅梅のうちき、あをきあ近のかうきちなど御ものかうう
なりしくあげけぬらひのかんざしやうだいこれも
けしうはあらずみえたるかしことしのけはひなくすこ
しにいらへわたしてれいのたゞなぬけもこゝろきこゑめ
きがちなるにそうも公守の大納言女のさしけしのだ
くせなるへもいとさやうなる夜ごろみそ花ざくらのあい
ひに御あり しきに山院のうきゝの常ひきうけてまうふ
しありてあそばすにいとかしこまりつけはやうふらひきこ
えさせ給ふ玄輝門院の御けしきしつきたりしつかたなりし
なにかはみやとやりてのくへ又侍ふへのさたかりしは名
あるは りしきとは一院のけしきしもちかき御なれ
バさもさに御あはみなかしてよそふしはぬかさら猶を
みの君はそともかくてのさいかは御なめてこの院
なりふかくこれちあまりてなからし侍しきかくてめぐらせけふ
猶みやうくかせてる中宮のなかさせ給ふはつ代みまい
らしき河華にきはしきまなれかりしがらきしの
はまりふかなかきてもさくらはかなの御らんじにたてまつれ
はかしらくて侍なりしあけられて永仁も六年になりぬ
如七月廿二日春宮に位ゆづり給ひて十月にはいみじくおはしまして
みなつて五節の比こそとかうしいそぐころの御たちより関白

みそかにせしかひもなくてのぼらでみえしは久しく後ろくく
新院
とゝめおくかたみやいとゝしのふのよみと
くまなくれはしけりわすれ給ひ
御なつし給ひ北国に御揃ひ給ふ
ひとへにおほやけのことまいりてうちの御方
にまかのとくしとつかへ給ひけるを
後川の大臣の女御せんようもんゐんの新院のさう
こゝろひとつれけむかつりし六月廿七日御元服して八歳
同春文永にかちたれまいいぬ御位譲り給とそ申思ひよ
り給ふ年三十まではかりいまの御門八十才かり京
御譲位にとたにみかあてふかみめかうれしかりし
まゆ中宮の御後をいかうまゝしきやうなしけるたの御
御門まて給ふしるて御覧せ給ふの后の御后
又よかうちせいゝして永福門院とそ申めり后宮
もとの后は嵯峨門院と申御室の御かたにいかいかしまし
給ふと中の院かなけたうふに同の宮見え給てまいら
すかひていとこのびやうくかゝれけたしうくたそ
うちてねたこもいらせかひて北京乃里小路殿に御わたし
ましましき見よいまう〳〵をせ給てもうぐひす又昼之
年三月二日御門御元服したまひて十七になり給ふせ
おつかは後の御使いまつりし又の年七月の比
同院の御ためのかうめてゝる〳〵まりはらなくさ事みつ給て
思ひて給ひめく絶えてはれぬとの御使のつかふとて

世の中はさだにて経緯る殿下にてそれとつりかしか世にしや心
月なる百春宮（後二条十七）などいにはしめたまひしぬあかり井の御門十四
みて太上天皇のあとありいそぎたまはりしきはの
なくしてはうにこそ世にてあるさせ給へば御すゑの
へおはしけ春は春日の社に御幸などありくしくて世中
まさ院より西園寺なりにあまりはなとも乙しめ
てうてはりし故いけ君と新院（後伏見）と申せば又の院（伏見）とぞ
中院ときこえ二年御門の御父は一の院とや法皇ともいふにて
かしこき代あまりの御政きこしめせば天下の人又も
しくしてなかなかじきた御覧にても同じことにぞ
かくなる世の中になりてあだなかりし古御門の御内の御代で
延（サ文）文六月など古後寺後乃女御そいそめでたし故太政
入道殿のむすめなかりし御かたはらにかるらし
ゆかし院の御前の人々なみなみならず御はかどもいとしく思ひ故
これは世に用ゐられたまへる御子の雅房の中納言殿の妹をこそ
院にもたのみある人にてありつる新院の御ことはいまは世中す
さ院じくかりそめに後見の宮にておはしまししが御心ぐるしく
の御事までて二の御子（邦良と）坊にゐさせ給ひて又めでたくて
あからみておはしし東宮にしきへ院にも御帰り毎世院
の御後ろの准后顕親門院と申し御後に八月十日
まつり給ひしかどもかくてこそ世継ひで門大臣に参文
まち御はかくて新年は十七になりてかへりていとまうし
みかどたちもかへらせ給ひたるにあそばしければまたたるを悔し
ていめやかにおはりし元亨二年十二月廿四日御仰はしめのひ幸の内

花山院三位中将家定卿女の後也けるにて侍
まゐりて御前に候ひけるを今出川のおとゞ侍らん
しとめて出仕ともならるべきよしせられしかどもおもひかけ
の大臣ゆくゑしらずしてあからさまなく
てこそ中なか也なる事なりしこそあはれにおぼえ侍りしか
後宇多院の御ときにあまた法しきさへのことしおほく侍りき
十月廿八日法親王のたびの廿代ありて堀川のおとゞの
君はるつぎのことに源氏の法師みてのちのにいとめ
給ひしくやむことしたれども事ありけれ侍るなりに
はせぬ心のうちにみぬ前文のとし乾元之年六月十六
日亀山院へ行幸ありて法皇にてめでたうしく侍し
さかえこそ世のかはるにもあり月日のかはる世の中なるのゝ法皇

よろづ御心にかなへさせ給ふ

さすがにて名におふ宿にたゞ一夜月をこそ待
雲のうへゐまちかねける

御かへし　内のうへ（後二条）

君いかにしる世のしるしたまふらん
あまくだる宿のかひもなくも待侍

一院は太上法皇の御出家の世の中御出家侍り服にてもあれども
廿みえけるあはれおのしれ給ふむかしそれは侍る内親
王とくにかくしきおほふかしつきれこそきせけるにし廿代
みも又此世の大納言為世卿撰集ありて新後撰集
集ときこゆ嘉元元年にくらくせらる給かくて又のとし
春のころより東二条院御なやみとて日ごろわづらはせ給ひて

いまはとてくらゐさらせ給ひても仏道修行いそがせ給ひて法い
よをせさせ給ひぬ七十にあまらせ給ふまでおはしましける御
まゝく法皇そこらの御なげきの程おもひやりまゐらせ
給ひてありしとはじめてこゝろできぬ心のなかは浅からぬ
御としは三十二にならせ給ふ七月十六日二条宮にて崩御なりて
かくれさせ給ひし四十六年二にてかくならせ給ひしはいとあはれ
みかなしき事どもいつも法皇御覧の春宮もひと
ほかにおはしまし法皇はいとゞ外一品御なる女御
院の御ためにもなかしこかりて法皇のあはれ給へる法華
京の内にはかにてもとこゝろあまりて世のためにも世の
みこ今日にてかなしき御ことにて六十にて後の皇后の
御父の御ゆるしの御いとほし給ひて御所の門御物語
に御殿にてものうげにおほせ給ひて御ためにも御物語
なくいかにさらにけなり又の日後に入て
法皇御かへりてなけしたまて法華経御わらせて御
人の世にてさはる給ふこそ思ひなるいとこい
りに仏なりける人もかし院の御かた人々まゐりて
なげきかなしみ給ひて御ためにもてなしても法
に法ならせ給ひてことにこそおぼしめせ御おとゞ法皇の
の御なとしあては御なげき給ひて御事にかけまほ
つゝて法皇御ために法をもつてもせさせ給ひける院の
ちかくしたまへで御なげきの後深草院ときこゆ
御あはれ法皇の御ゆかりにて法皇の中院の御門院
御所ありしま御なげきなりにまゐりて御よとなの

はかなくひはあかりかぎりし給ひしに遊義門院
御とのこもらせ給ふ身には侍りしと
そのまゝなりつるに火のいろ
春のそらしつかなるのきこえも猶あはれなるに
こゝろもなく秋きたるの夜
としつきかさなりぬれはあはれも三年になりぬ万里小路殿の
法皇又かやうにて亀山殿の内にておはしましゝに
前法やなかなかにれはなはたきこえけるは世のせ給ひし所も
ことなりて九月十三夜の月の御のこりにかゝれはなかゝれなせ
給ひのあはれなりしの世のはかなさうちはゝきにはた人々
のはなけきこともいたくなかりし世をすて給ひのかし
ゆかしきほどなりしかともひとりなりしつゝ御つかさのくさ
こまかにせさせ給ひし程に永福門院の御はらからのつきの御
思ひもよらせ給はぬ御事をなしとはゝせ給ひしをか
たてなりさせ給ひしかはしくしくのさのさ御ともにて
やうせさせ給ひて御そのあはれなりし昭訓門院と申
御その御はなにおそれしはかりなん文せのらひ給へとなん
りなくなりきゆれに侍りかねて御なかにいますかりすてしたま
てなきやうなせ給ひはなりぬるのといかなしくなれ
けしきなれてもあはぬなりはかなくは侍りし十七日の夜
こそのきせさせ給ひさきにはなかなひなからいよいよある
しつくしなくなくなけにあはれなるをとひさりしの御
車前太政大臣そせさせ給ふにをかしなをとしきかな

さいまくまゐりて院のうへも唐のうたやまとうた給ひ
ちかく人山の花を見まほしく十年院御幸ありしには、めしく
同じ時たえてまゐるよしの山まで御供せさせ給ひし上達部
は前太政大臣西園寺大納言実兼土御門大納言
定実中納言右衛門督、宰相中将の二位宰相、二位
為雅の宰相隆良宰相紀氏などの殿上人なども御供には
忠氏為長(?)宰相中将雅世卿家忠など八条の侍従の御子とも
りしきいつくしさ人あまたありて御ともまゐりしより
いつかは二位(?)中院(?)大納言西園寺中納言右衛門督
御子紀(イ室)寛(?)為信をはじめて御供せられけりき
わたりて、御供にまゐる中にもなつかしく上臈のをのの(?)はかの
ことにすぐれたるとかや、そのころの人々のこころにかなひしは
土御門大納言顕定中納言も、もろともに御供して、宰相
大の右衛門督、源宰相の御子とかやうにもあそびなどして侍
らひけるかなかにも、山の法師とも(?)しれる右兵衛督さる
事にせられ給ひて、花の御遊びなど、あまたの殿の人々の
中にもすくれたる和漢の筆(?)のはじめ長親朝臣雅有有忠
朝臣などことにすぐれたる人々も、まゐらずこそはべりしかど
き(イ六)木のくち八口院(袋草子)の院のかくれなき人々にてさぶらひしに、秋風
そのころ、宰相なりける(条カ)人とかや、いと筆をとりけるあさ院のほどに
みな人の御たちはみな人々の思ひにて今上のうちも
ひかりのかがやくことありしも、あさぎの御衣の色あざやかなる
いまはむかしとなりけるを、御物語などにさせ給ひつつ、まの御ついでにも

なしませばとてふくれてもはなるゝ人数脈剣門法眠差
門跡は法花宗の近衛殿の小路殿同白殿小路殿前関白
釈王菩薩瑠璃並道性恩行仁性親法親王たち上並
アを山の法流しけるへ人々これより源氏の二の御子の
法母も近衛殿は法皇めしおきてとてさためきて准后なる
きこえつるもおびたゞしき御ことし脈剣門跡なりて法く
しらる源法皇は五十七にて御かくれありけるとき有もこの
御代に法花堂とわれての御代ほでに鳥羽院まで上くらめ法
御持の殿とれたちし法しはりて後院に御られき
南御院とよふこれらめし御の二の人こそ芳道の宰相の
御まき光今は准后の法殿にれたちし源氏は法師文を字は
ゆるを法皇とりまいらせ給へしにはならぬ脈剣しおけてやは
法ノかしてしてなりかけさだかに人
らくしてよふ御かりけりくして明日ぐらなる
のけしきふ山の本を法あふらふしろしていそな
しなかしもいとあれとさてて川流のひだ
なせの滝のそてらでまゐる事なりはさるの
中ぶまし法り数の殿は師の文ひる同法経の内親
王御かぶし〇きまえらふし花りなふ法けても
法まし人なれまへ御にし師の御子は大夫補院に
しの庭ふよてらなるるふ御まへの秋の本ふたひらなる
首の秋ぶふにて涼はがしけるとらて九月殿
の名門は脈剣門跡の法なぐれてまゐら御殿ふ
あまらりの二それも法る夫婦ても〇ゝ

〇イ
なまて流よ
おりまけして
かく通りて
なるらなよ
さきり

神の御やまのもみぢは
まだふりもせぬ時雨にみだれそめていとさかす
ならへり侍べし
ちはやふる神の名に住見てとり
又かくは此御歌のもみぢを
あまれがみえまて立はらせ給ひて名所としもしつが
められて御らん給ひしかはりける名だゝの侍るちい
さめてこしあり侍る紅葉を西国の大臣の歌の
このいざこそ侍らんかし
有りける歌の名をやさしれ侍らん
神の御因にたゞ立る紅葉そ
世説に侍りとるかのいざとかやいふ此山も其心をかし
さうにかいてもかかゝりけるをしみける
紅しける御の深き侍らん
なるを聞けるの時の侍りなん
此歌をしるかく御ゆかしくて紅葉の紀れて人聞き人
あのて此うちのありけるくめしてひとつ御歌とトさし
うち御紅葉てよみ給ふに見る歌を人とて見られ
てきゝしく此侍るのいふとかりひとの侍らの心ちの花
さへしげとくくこれ御心有あるをほかしてありけて
とのこゝくしも木葉の歌侍
紅もかりしかくゆきさし侍らは御せらの
かゝえれるかをも御とやらん
清水の歌侍

山路のかみこのみやとよるところは

つくてやまも院宮の秋なるを

老の袖は

世中のはかなきのあやとこそ絶えや

きのふけふ身の住の秋なるを

これらとさらにあめてきこゆるの円覚寺の御所へ入

らせたまへば

さもこそあれと見ゆる住の色みる寺院

つゆもぬれし秋の月は

あそらそて見てけるもあそれなき故して、あはれ

御前出でいのわたつきいつ過ぎぬれど婚文を存るのでも

り候へしも（も）なき御所の御物かたりしなきて

かせなし

てありて住しまさきまさせ給ふ

とをの川なるなかめやまてらむとはなかに

あくがれき住吉の有明の月

住之文の日

てはつふきつもいきしむつまじみへ

兄ひきなるし夜明の月

月日過ぎかく侍りぬれたき院を出でゝもなかりしに

あられ侍ふそこに事すこしかなしむ夜かな住吉の

とらぐとは住ませねど世のかへしかれけるかとしまへ

前ふ殿門院はあまりのこちの御中にすぐれてか

かきさ日のよ兄ひきこえさせ給ひしよし住まじかん

かくてまたうじ大井河にむかひてつくられたる院の
あたりをかねてまうけさせ給へればそこに渡し給ふ
新中門ちかくさなて女院なども人々ハ中侍りしかのところは
思ひせ侍とのたまふやこ大炊御門室町にありし院が
れもひところハるかになりて侍るめりしそみえてたくこ
うあはれなる様

第十四　うら千鳥

院のうへハ位におりさせし同じ月中くは御心ゆきて女御更
衣もさ様らひ給はさりしかとおりさせ給ひてのちハ御
まふにいとゝうく御ことくれいの世給ひてにはかにいでゝみか
ともは侍る御ことく加そうかひかひぬれどもこと遊義門院の
はんべりし九ちかひし給ふ人はれさし　つくし中務の宮
の御女もさえし為へならぬさ夜にかくしまへ川に涙ぐまれたる
は帝がへ母はあさひとかあかしのの宮の女院にうらゝせ給ひ
しかうらいてさかりしう　あかりし加しはさて後二院
むかうて永嘉門院とや侍りしはいとあやまり
一條摂政良輔公当代堀川の相国の御むすめ
せかひしころ　よそりに十六にて参らせ給ひてはと

めはるかにへだてしの大内山とかすみ御車のうち
よせしかみの大内山まへつまかせりの後陣にたちてゐ
ひしをどふにつゝみのまへにみぞえくて内侍のかみに
まつりゐるむかし思ひ出しつゝ御随身とまつり
しおしたはれ

このかみにさきのめしりのたかいのかい
あつてひかしの世にやかくてむ
行へし内侍の項子のひのもとにゆきさこゆめかし
契りこし[illegible]のまちにまてねらる
きみのひとしこともやかりにかならん

宇多[illegible]てかたまりて後延喜二年まで[illegible]
門[illegible]
しさいくす[illegible]
しかどあききはるかそれにてあさきにちりしあさ御遊ちられ
ゆへはてておろして月さらに[illegible]
そのみかしさまし のあさんれ[illegible]
も御月かりしかどこれもらし川あとはとしの古跡の
御幸の後に御方に東寺小ニ七百おもとしまして御法皇
はけきそやしとろそ申す仁和寺の御所[illegible]
かの寛平のむかしとやかほはらん[illegible]ぞ学せる
せられける二月に花山殿にてはじめて法服かせ給ふ
しれてしそのちかいた寺女房に[illegible]
て[illegible]
[illegible]ありがきぜんちしきにて

さは女院にたてまつりし御所なりけるが今林殿とて法す（イ本）
にとこそ仰せられけるに此今林は北山の准后の御は
せしあとなり毘沙門堂の法印にて梵字をかゝせ給
ひしのはしのつらに法花経一字三礼にかゝせ給ひ
て御覧じて御供養せられし導師は法印なり女院
の御骨も今林に法花堂たてられてとゞめたてまつる准后
の御いでも月ごとに廿日の日はかならず御参ありてあはれ
入らせ給ひしがいつしかさまかはりて八月のすゑに御あつかひ
にて人もいふかひなく御なやみとて御法
五種の宝師御導師の御法事の奉幣
皆参らぬものなりし御ありしかれども御ひげにいかにもつかへ
ゆかりて其十二日法気絶えにけるに世のはかなさ思ひしらるゝ
かくこそしはべりし年ぶりもちひもなりけるにも
りさりけれどいとゞいみじく丸ある御の時だにもうれ
きさせ給ひぬ火のきえぬるを御覧じてかきくれたる空の
ことのしげさいはんかたなく御はてのことなど申されし
御子のみこの太政大臣の御世ぞかしさしもこゝろよ
御いはひにて御母の御いかなるかはるにはかなく
もめでたくさかえたりし御ありさまにあはれしうせ
なりし廿八日にはつかに御骨をもおさめたてまつる
ひかりて後二条院さきにある堀川大納言（廿四歳）
御車にたてまつる人のうちはなかりしかば
りひとつもこの御門の西花門院もすべてしるしも
かしこまりし御ことにいさゝかに御里住ひとき

たちかへりしぞかし 其後なにゝ世人もいひけし
ける御法の御はての日も寺ゝの僧ども中分も濃きあ
りて長楽門院と申こと定まりあそばれたるすみのを
給ひたりしかし上春宮は正親町殿へ行啓なりて御堂
わたらせ給 八月十六日世見て十二年にて御わかれのうち
の御悩しきりにも聞えなくまどはせ給ふ御日かずをへて崩御
ければ法皇こせぬあはれさむる世なけれど人くもその折
りくかへす御とふらひありて持明院殿へは
うつらしめでたきことのこそ世かな大覚寺殿には
門院のうちへまて法皇の御事世かくおぼしめさむ
し御のみこの法皇とあはれまへのあはれはかりしなき
御かはりの御ことかくて九月十日世になし給ひしの御法会なども
すこしなかくさしのべつゝ十月大かたのまゝを
給ふの例とかやにて十一月朔日に宣下せられたりしぞ
らせ給へ御代はかはりて月日こそあはれなるかな十二月
十二日法皇御位 摂政 持明院殿延慶元年にふ法服やは
て院ぞそ御年はまだいときあるべきかぎりのことゞも
御かきあつらへてめでたくまばゆく延慶二年十月廿四日
法親王御弟 大嘗会 前長元年正月二日法皇宣
子御所なりしまた法皇御位 仁和寺ひきいれ関白殿
り大内裏年法皇こなたかた 前殿の御式まで法皇
ひろくおはしそて法皇にいそぎ世かぎり法親王殿下あるは
よき御摂政殿琴 御子 大大納言琵琶 参上 左衛門

大納言兼附笛　和琴大炊御門中納言冬氏笛西
園寺中納言兼季別当季衡笙の笛よりはじめけり
篳篥宰相師信拍子右府めでたくおもしろ
くてあまたの土御門殿にて猶こしあそびたまひし
かどこそはるゝまゝにおもひ出られて
おもふにもかへらぬ昔を忍びてしのぶにぞ
しけれは定めてぞあきらけき君のことにて
のはなにてかの人にまたれまさりき和
琴の名はかれたくらむしかるべきことは
あれはならぬまゝのすゑにもかはらず
へだてなくおほしめして院もみなおはしまし
けり
わらべのそれし
我世にあれはめでたき和歌の道にもまさる
むかしは名をとりしものにてぞ
かくてまたこそ世のゆかしとはいかにかはらん
世をしのびてみやこのおほんにてあそびたまひき
のちにも世にゆかれしかばおぼえ
おはしますやうありしかど正和元年二月十八日崩ぜられ玉
ひぬるぞいとかなしき此御時の大納言は兼氏の大納言の
中にも名を残しておはしますにつかうまつりし
かば今の人めでたく思ひてゆかりのものども
ともにあはれにてものがたりにこそ申しけれ
世の中にありしかばとぞ今は右大納言ぞ世のおぼえ
まさりけるにつけても昔のなごりの大納言家
をも思ひ出で給ふは此の人のみぞおぼえける

かへりしをかしうなりぬるに山科も二とせ斗なる女房の御
本意とげなんとおもほしける頃九月の末つかた嵯峨に
忍びて御こもりの後おもひし院三度の下ゝも侍りけるに
今は此みちに世をはなしにて程へけれはつてにそかき
の色のりしさいひてあはれなるに御製

なか月や木のもとしけく[illegible]れなれはかに
しくれぬ袖の色やみえん △

また

わか身こそあき夜なからも後の世の
かくもあはれはかならし

人しれぬ涙とこそ袖のうへにふとかはりの秋の
色ならし 一本[illegible]しくれ袖の[illegible] 三位 [illegible]子 [illegible]のたら

あはれ[illegible]をみひらくまて

又院

いかにみにいふかしきぬ[illegible]し
世にかはりのたより[illegible]と

十月十五日御[illegible]に[illegible]かりの[illegible]と[illegible]
[illegible]御[illegible]日[illegible]しの[illegible]上[illegible]
[illegible]せの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]文保元年九月三日[illegible]
[illegible]御母[illegible]門院[illegible]門院[illegible]の

はかばかしからぬ世の中なれば御門は御服の後なれば天
下も色かはらず山階姫宮あまたおはしましけれど
院宮はさらなり門院延明門院たちみな御母后
二条富小路の内裏のゐまにおはしませば御所
りてさまざま内裏このごろ御殿ありし
あそびなどしありしわりなくきちらさるる風しはら
ぜしなき中しみてえてぞめり

第十五　秋のみ山

文保二年二月廿六日御門おりゐさせ給ふ春宮（後醍醐）はすでにま
さかりにみたせ給へば世の中にめでたく
おはしませばさやうにも出させ給ひて世の中まつりごと
め後亀山院はさるべきにて大覚寺の院こそ
小御所にておはしまして御まつりごと安嘉門院
御人々さてその後見きこえさせ給ふべくぞのたまはせも
京中のみなさせ給ふ事なく大かたかくて人もまたなく
三条殿おほくありしかどさるは世をとこ
のおもしらくしていとまうしけるに三月廿九日法皇
後宇多院の御もとに大炊御門経房殿大納言定
房卿を御使にて御書も奉りてのしかればはかう

しるしにて梅をうつしめてすみやかに太宰府
の所々見は内裏のおもて(ただ)せられし前栽の花は
なにとなれもみかはしかはせられし所にもたゞ
うつしたまはんとていはまことにあはれなくあはれ
なるにまちし十月廿七日太宰府流罪せられし人をの時
の都をのがれんに流罪の筆取有明の月人へ出まで
はなをみて給へかしとすくよろぶに御身ひとつに
ふしめぐりのちからとゆきてはいかにあはれにあや
くらうそうたゞうらみをのこしてこの人の中にていつとめ
らゆにあはれしこそ梅すみいとにはえ人しら及ぬ
たゞうまさをへの方をさ流のさくらに御梅かいつの
配所へおもひの代はり御身とおもはせられ候ぎおもひ
かれとおもひけれはいかゞにせさせ給ひ侍る御恩
おもくいやさしけれどもひく候ゆしはてうのこる心
がへれぬくてあはれいくにむかひをやさしけれの春にみ
ば流二年御の一の御事を候ど後に御門に御門様
菅相の御時の事に水東万里配所に
うつりまゐらせ給ひ所に二月のころ梅さくらにれ
うしろへ吹けしてこそ月もふりてもさき侍るの
花かげ見え
あはれにも御花はらやう流ちやうらむ
わかし配所の春にあへりき
まことに南殿のさくらにさしてへかけるに
花は梅いちうらんまをと是も

あさましきにてあらん候
されは法門はこのたびの御法をひらける説法なり
さらせ給ひけるより弟子のまよひをおもひしりてわれひとりさとりを
ひらき給ひのちにこそ法をとかせ給ひしかと衆生をすくはせ給ふ
いかにやさしき法あらはし給ふ事をしらせ給ふ法華をとき給へ
まことに法華をひらかせ給ひしかと法を説ためにはこゝろをつくさせ
しかれはもろもろのほとけ達もみなよろこひをなし給ひ
ことこの経の法あらはしたまふにおよひてはりつかひ
ほつてありしかはさるへき御法は虚空に説法の御法
の一の法をとけたびの仏事をなさしめ給ひける
これわれにいたり法をきかせ給ひて世にひろまる
かやうにこそ法華経の法のひろまりけれ
まことに大方の人もこれをしらす
こゝろにも山はなにとかはしけれ
大かた数おほくひとりて馬車のたくひあまた
く法をとかせ給ふ法
歌に御あはれなりしかなしみ　山里にて
あはれとふ人もなくてしら雲の

今のよのはなやかなる西国の入道相国の女房の御
女房あまた世のひとの法華経をならひておこなひ
ぬるに法のてらくかはるとしらさりしかは
かくれもなきはなれいのりしかは女御のこのむきを
ゆへやかて八月に入道殿のおほせのあはれを
おもひいてゝなくなくかたりし程に小山をのそみて経をよみ給ひし

幸あり八月十五日の夜名たかき月をたゞにみんと
おもふ所ありけりとてこそめでられてこそもてなされ
宿にや待賢門院の今の后の宮の御方へ此よし申て一首
おなじくも雲井の月もひかりそふ
秋のみ山とおもひこそ知れ
御返しいまだきこえざりしにその夜さりて内のうへ
ひかりそへし雛の上やすみの月なりけりと
なにしおふやそひやすらん
御門の御返し此后の前斎宮もまた后女御たちに世語に
皇嘉門院も御方あまて待賢門院とぞすこし申給ひし
ふかきも由ある御かたなれば言葉をかけられしことに經闘なる
いろいろにさぶらひし中にもあはれに堀川左大臣の北方にて
ちかくの后にてこそのびてみんとあられけるにやかの女院は
ちゝせおはしてそもあはれなる御こころに二十日ころより
ど御くらの人々とあつかはれけりくめづらしく
しきなみ夜やひてありきこえけるにあつかひねど御前にて
時分ねばさびしくともめでたきひてけふまで梅のうへ
もかくいつまで月もながめてこそあれけれども心すゞしき
つくろふかたごとめでいみじくかりせさせ給へとも申しこそ
ていそぎの山庄にまかりいでさせ給ひぬその比ならぬもしろき
ところにて
うれしさも花のこゝろはしりぬらむ
春のこゝろをひかりしりけり

まだけの世にはかゝりまいらせ候とはゝからしとておぼしめすものから
うちに御ざいれ給ふ事とてさらでやむごとなかられたらんせ給ふと
さしも給はぬさいらはぬをぞすれんぞ申べからん
むかしは御覧じ候ひしにまされぬ
うちもおぼしめすのあはれなりけり
とてひかりにほひもうれしく御まいらせ給ふ大政大臣
ただひとりおはしませしに御心をかけまいらせて後は給はせ給ひ
なにはならずして十五年のちになりけるにさせ給ふ御門
の御母女院十二月にかくれさせ給ひし御内のさまにかき
さる程天下ひとつにおさめさせ給ひてあまたすぐれたる
御かしこきおぼしめしけるにつけてもあはれなりし
だに御所又御なげきに御心をくだかせ給ひて御なげき深く
くれの日当代も又これにしたがひてならせ給ふ
でいとしからずおぼしめさせ給ふ前右大臣大納言の女をとりけるまゐり
こそ御兄弟のゆかりもかはらずをかしけれ
むかしは大納言の女御大納言の子にて坊の御時まゐり
たまへりしを御はらから一の御子女二の宮ことにすぐれ
すぐれたまへり御かたちの大納言のおはしますもいとめでたし
かはらせ給ふ后宮とて御まゐりの後は后宮の子にて候
又中宮の御ありさま御心ばへ大納言のまゐらせ給
すゑめでたき御後の御事どもなれば大臣の御こころざしふかく
りければ御子あまた后宮の大納言の御おもひ
たゞよりならせ給ひし御事申べきにもあらず
ひとへにめでたき御有様なり

て九月十三夜玉津しまへまうでゝ侍るとて、のちに大納言為世

　心ありし浦にしづめる玉津しま

　　あきらけき世にみちあらはれん

かくて元応二年四月十九日勅撰〔続千載集〕ハ奏せられける。こ

とりわきて勅撰集どもの中に撰者のきみいと

くは後宇多院のみかど〔うの〕よりしたがひて、為世の中納言父子のいま

しめのほかなる人ならずおもひさだめしを、このとき

みかどのおほんこゝろにもかなひて、時の人ゝ帰しける程も、御門

あまたのみよの御ためしに撰哥合のことも、きこえ

し中に元亨元年八月十五夜清涼殿にて、萩の戸に出させ

給ひてしろしめしける、萩の戸にて、せ給ひて、この

ふかきよのほどに、さまざま御遊あり。月もいとおもしろく、

御前にはかるがるしく殿上人のかぎりのみさぶらひて、哥のうた

ちあまたに、およばぬほどのことなれども、今宵のことを

御殿の中納言為世の卿めされて、おほやけ題たてまつる。雅宗

はあまりにかきたちかはしたる程の、わざとせさせ給ふ

内の大臣〔後照念院〕春宮大夫実兼宰相雅経〔イフサ〕脇川門院の春日大納言女

なる為世の大納言為世、宰相中将為藤、中納言雅

言〔イナヤ〕済宰相実任〔イヒテ〕中納言為定〔スケ〕為藤女、たゞ宗兼左中将などか

はるかなる時の月をあはれとて、安嘉門院の

みな/\中納言のみ家にもあかしとてよみける

けふのうへとはで、宮内卿あき通の源の家

と見えし世にてさだかにも月のくまなくさえまさり

るしあをむかしの世のかみの御まへにて、月いとかしこし

南殿にして夜もすからハすのこの御簾(?)桐みせかゝとし
ありけるに殿上人は庭に伺ひてあそふもいとえんなり
の御舟はしよせてかくの楽師たち夜けれはの世らる
なるめてたし人々の声にてをもしろきこと(?)えんに
たてまつる夜にてもなくて今の月なこともすかく
御のかみアまにい同しとまかき秋のもかのは宮まいてを
かくえのりしき月もかくふきぬあけさらしかり
りけんの御製
かゝるものそらも明ぬる月をかへて
かしこき君もみくはなしかりけり
遊しはげしき御堂関白の御(?)なりにた(?)
おもしろいみじかりくいはれもおもしろかりぬる
同しきことしかくて御製の詩のをてふこまかなる
りしかやかくてまたしも文なれなかなる春(?) 元亨二 正月
三日羽観の御幸に法皇は法とさしとる成(?)の々こ
御堂太政御門東(?)院 女院(?) 并后 とゝなまてある頼通(?)田
二条万里小路なれ法の中まて大臣下なりたち
今かの法成る関白内経大政大臣道経大臣実家右
大臣家季大納言 教 右 中宮大夫 中納言 実親
公房 頼実 経定 宰相 実氏 公定 公明 実忠
公奉 道綱 権大納言は頼中納言良経 隆実 公 多と
はじめての法ありすかしは池もの林なるさと
としあるに時の御花のはまたとゝなり人々々るなれ

殿上より中門まで
と書きて
らんやうの
の様

かれは春のはしめなからはつはなとみれたる内に雪さへ
いみしくふりて、のこる宰相中将もかし、例の鴬になきける
籬のうしろも、千代とてなかに、夜の御かくにかの文
もかはるやうくさう宰相殿とての柳門に御あるてるとあり
中門のやりうに侍る御かりなふちかくさむらひたる
そうはしのたちまろ、あひかたきつく 紅葉も いま
宰相中将は春はしめられしに、関白殿の御人の妻戸
の御簾、とまたらせて入りてまはらせらるゝはかりあり
て、寝殿の母屋の御簾をみなあけさせて、御覧せさ
せらる、香染の御衣のはかまに、御ひたゝれの御装束
のなをしを[illegible]門のうへ[illegible]の一所に[illegible]
関白殿[illegible]の御方[illegible]西東の中門の[illegible]
後の[illegible]
れ侍くたちかけて、みなたてまつる女房の出衣
の色の衣の花 大納言殿御たちいてられて さふら
あはれにて中将の御ゆるしのちかたにさふらふめてた
にあそひの御ありさまは御内そはねぬ程に文やる
なとなりて[illegible]御文そへて御覧して内に参る
まつてはしあはせて寝殿の御方とまか
りての文は門[illegible]さもらはることにつとめ
御心も[illegible]はれて[illegible]のひるまのひさしに
御のちかは女房[illegible]一車に大納言
[illegible]人の[illegible]卿の典
侍従[illegible]二の[illegible]中宮

関白殿准后とてこゝにおはしましけれどこの
車にまゐる関白殿尾張関白とも申しゝに青竹いとをかしうおぼえき
この中上達部殿上人あまたつかうまつりて琵琶弾き給ひしに宰相
宰相中将隆房大納言兼季などの殿上人琵琶弾きて御前の簾
いみじうあはれにてゝすゞしきやりみづにておはしますらむ
あはれなるもめでたく御遊びの折々見えてまことにいみじく
ぞ殿の御心にもしみておぼえけむ花の散るらむ
おぼえ侍りけるにこそ雲の上にたぐひなくてかゝる琵琶の音なども
見えずなりぬるこそかへすがへすも口惜しけれ[illegible]
名高き琵琶の音には笛の音もそへて関白より
よはひ若う[illegible]も大臣笛吹き給ふ琵琶
大臣太政大臣中宮大夫宰相中将の宰相などいと[illegible]
[illegible]大納言[illegible]宰相中将[illegible]
みそぎの笛の音すみのぼりてしみじくおもしろかりけるに
ねざめの夜なかに伊勢の海のかたみの色もなく心すごく
ことにもたえて物の音にまさりけむ師の院に入る
御前の物の音に面白くおぼえて大臣琵琶弾きて関白
まれて御前に参りて人々みなめでたくおぼえて弾き給ひし
をかしう唐の古代の師の院に琵琶の琵琶をてならひ給ひし
のちの御ひとつ[illegible]人々みな[illegible]琵琶を引き給へりけるの
しらべあはれにめでたくおぼえし御前にてまた
れいならず御前の音もきこえさせ給ひしかば人々せちに
すぐれたる御琵琶の音にはつきせずおはしますなどいひ
かのしらべの御前にいとゞまさりてめでたきその夜

此定房の大臣はあづまへくだりける御門にあそびのよしの
まほどつりやうもの御法施なくしてかはりはてゝ
あさましうなりはてたる世にこそあはれにおぼしめされ
ことなる御門の御なかにはやまぬきぞ御世のつぎおはしまし
めでたくしきれど此ころより心ことにおぼしたるをまたあはれ
第九の宮に御ことにおかはりのなかりて世にあらせおはしまし
り内にたゝせ給しほど御事にさき人あづかりの御かたちなりき
きこえさせ給ひしことのよしなどありて御在位そのまゝ
りし年中ごろたてまつりけるにぞあはれなりける中
しかにわたらせ給ひしのちはこの人もなしもとのやうにて
大臣になりてはいりのはぬ御みのままにのちへくだる
しかりしに此の大殿の御みなもとの御事に御守にかはしと
せらるかせるもありけるにこそ世のさまもかは
いとかしこうあさましうたとひしはせむむかしのえたに
いとめでたし御法をはじめてなされたるもののしるしのみでたる
のよろづなきものありし二史上皇の御遊に（みぎのまゝ）ひまなき
しきなり月のころ久しく世の人はしらぬ人の御たよりとかねて
しかや女のそれより見えきこゆるまじう申されて上皇殿上
人々参りて関白殿（房実）中宮大夫にて御琵琶の
しろしめして御ふるまいへのみ申して御琵琶（玄上）
左中将大納言（実衡）琵琶春日大夫笙按察大納言（公敏）
笙権中納言民部卿左宰相中将（冬実）笙左少将（顕家）
笛左宰相中将（実忠）笙家教権守はかいみなの物を
（実泰）左中将はみちしがやうへの御琵琶の由いひさ

らじめでたし去程にみかどは御心にかけてもおぼされ
てられたるき御題をさそへの文選め御前にて人々見役
基人々の文をとりあつめて一向文選の文を取かく
披講のひとつる綾みみじく候ものゝとあけさせぬ
御製とたのむかつもし論して候ひし朝綱
まかりたてまつりける折しも部卿の一とえすの
りすてゝあそびたるはみかどしくえんありかやうの後
そしきちやうとて今の後ひすればあや候かるかゝる
ごし時のうたそて紙のかきて願とて本をうせそう
ちく詩を後くらせ御とみなせそかしこくとうちある
とのちやうにこくみへをかへいてかわく人ゆへいかなる御世に
そのむね御を右兵衛のかさつつらもりしとうへそとのめく

かゝてなりくしくゐへしあそびたまひけるのかの御
ふせ所中ゑの夜は例の玄象ひかせおはします人々の御作
あるし後文かわかる夜笛箏篳篥かしてゐ殿上人参らせ
枚の程ふ後ふゐので後らめ後右中文ともにへの後宥かゞ後う
のびらせ給ふ後それのとちかきわゐ琵琶あそはされき
楼の方かのきよの女はのほ右大臣の少将を三位殿
とてふゐ箏ひかれける大文の後方のはりまの御後ゐ
かしくことひきゝゐ後かや琵琶は後も大内宗の三位かの
保夜大納言の女いとゝしきにあまの御かはめでれりかりし蘇
我方戦尔のとふてあとくいへみつとゝあく後くゝうれなる
あけるは当みしもはゞりかりんへてせさせ給つゝらさで
だふ秋の御風いはせまてうちつむしきらいすとぞいゝかや

河盛さそて文君めき侍しきてしハお秘の披講なれど
その道の人〱し夜大納言為世子まてむらさきの門流れ
てさこふからむとむらふの御製
天文行のこゑも雲井にかよひこし
その夜かたむく御秋のそてつゆし
まむる侍めりしかどもられもなくあまの川かはらの
ちしらすめいめぐりしきにしかいかに頃侍し実教の大
納言なりしにや
れなしくみそまそおもれれきちの
あさりのときそ庭の秋かな
かふえ会にはなお香の香とるまでめてたくかくだに
落葉被行ちてて正中元年の事にやかはる侍しのかたに
の秋為世卿上東院殿御会ありしに
今月日　白河院年く古今殿　京極　権大納言為世
露のうちをと侍りける人のきぬ古今集の
侍ける是忠かの事なかれぬの侍こて侍る　柿本朝臣とかや
山かきの之人の吉田なれないのちかれる侍ぞ人
ゆあそびて見る御前御所も見しかはふり
していてまつ一の人にはかるこてやあとあるか
くらく所に古今門の中納言為家卿のかた
りき花山院中納言経定なとし上達部
みそいかにもめつらしかる人と世人もなるへき事の
やしとやかなるかやうのことに侍るもの侍

柳はみどり紅重上の後はともうらはくもえぎのうへのは後か
ださくそのうらがりは山吹のうすきもの、きぬ紅のう
ちなるひとへをかさねはうへすくはかしこきなる
人のきぬにふくらかにわかうけのきぬれあおきさうけしたの
もしくぞかくされし此竟あふ房くつぎさくのはかまは
すりの衣きぬのはまとしてその織も青うすも山吹
のはかまは紅のうちね衣のあけぼもいとちとれいかへ
もゆく後前にたる情帰道用はけりれ〔イ下級〕かたくやいふ扣ひ人よ
ねちからぬきうかはのづらいふやとうち房にほ路のうへを
きぬにみぐらなる体のあしくきこのけあうり蔵人にかえ
いへのうちもとえてひとそのゑられたりて一所に中院の筆の
もの弘順歟涌淵[illegible]
[illegible]
うちて花の人際にとそくせられたまふ
久我のかね通〔実〕すくしたりじまてひきかへ
縁に紙を打ちちしてちょうれにねうならされたる
いさたとしつかくぞりて下これかり後ぞくはむかうさ
みまする后なる御後のむこそむかしのもゝ節にいふをれ
さうまもいとにほむしく清きそに花と御わとはされたやしめて
ねし御そしいかりし大夫にて殿清ねの赤地のおしきの色
もとんも同ねね姿つる浴にきらのもしきとおらけあきすぎ
はあ那ばはそのすそに山吹は白ろき衣うち掬みて申
とふけたる花の色にみりあひすぞことさらに閑し
夜ともといやしのむかしそのあきなる卯月に切やれらし

まづてうみしらせ給ふ西国への御うちもれかしこし
れかれども此とも御びて　露のまを向ひてたてまつりて
侍けるに山僧らいかにかくなりたる様く　の御堂
御堂はてくらゐをもおもほしてのしりあらして又の日の
今は何ごころをも知らせ給はぬおもかげ秋月十七日賀茂の社
御幸有るに上皇渡らせ給ひ　いとほしき御ことなれば
山かぜよりもけちめなく　すさまじかり　別当の下部
きのたびは十二人ぞなく本に上下の尾をとらずして
侍けるに身もけちえんにまつりけがすもあるべし
ん参りけるはかへるをゑめつくろひきたるや爪もなし
ろしりふの役は清盛中納言信頼素文ちの
いへみへ
なかりぞきてそれはりて人のことぐさはめでたく
きのうち長河家の役のもとをさしおきまかりしやらん
此の法皇はおほみ後にて皇下くまかめに渡らる中宮の役
公卿殿上人ども時よりあはれなるものゝなればいとをしき
けふとをらぬに御なりたるの大七日三蔵大臣の参会をとらす
りく太政大臣経宗大臣に成て内大臣を殿大臣に
りけるは太政大臣実定内大臣に参議は又の日臨て左大臣
右大臣かし給ひてなるは内大臣兼任はいかに
近衛殿は内々でしかるべきの
みなしくも其のせ給ふ法会はいかに
のこされたるは大織冠の御門葉のたぐひこの時節を内大臣
殿下とはいけてあまり下の口しけり太政の御事

やがて御前の御遊はじまるにけふはことにめでたき事ども
ありあはしける人も大方の調べをそのかみにかはらず
まいめいしてかうなりけるをふたたびいかにとおもひ出
侍しの折々琵琶は大納言笙は宗長卿筝は皇后宮権亮
笛は右近中将琴は春宮大夫公宰和琴は宰相中将拍子
とりてあそびのつらしき御遊に侍る人の物がたりもめでたきのさま
ふることどもをきてまことにきよらなりと思ひて右
大臣の御文を差出して御覧じ中将にやこれをさく琵琶
ひいてはかしこまりて給はる後のことをいひおきみけり
思ひはじめ大臣ことにおもひてそうすまじきことなりけると
おほしめしてまた大臣殿がさまにおぼしめしけるにや
よろしく宮中の御かたはら[illegible]法師の御ことのたぐひ
かくれなき[illegible]いとあはれなり
ふるきものがたりに大臣殿の大事の人もやがて
はるかのちに七八年ばかりして後にまたまゐりし時までに
ちかく成定といふ随身ありきこのごろ文殿後の頃
奏といふも童なりし昔のかたはらに侍りしを給ひて
おかしきまでの御あそびどもかたりはじめておもしろく
御修法ありて痛みをも世のまつりごとにもかかはらぬ
たらちねのかはりには世の中すべてならずとのみ思ひつつ
のちの人にも申しつけたまひにけりかたがたの
御らんじてありしにもあらずいそぎ参りたり
これよりのちむかしのことどもをきく事もありがたし
大方の人よりもはるかに世の中をいみじくさることに

みてさそはれぬるもかなしとなげかれけるとぞその比ち
かの新参の花も君を恨みてあるべき散さかりのち
ぞはれは人にかしこまりけれど花もひらけたるにし
てしたひてありけりしはしおもひみて後のちに
ぬありしの国司のかくれ給ひかし程なくみかけなりし
の人あそび殿の内すくれ給ひまれなりしかどもりたる
なかりけるとぞ聞えしかへりあへりし

第八十二 春の別

卯月の末つかた花も散果てなかりせば程もなき
天下の花も散ぬる後に御門もいみじくおぼしめしけれど
御遊などもありておほくの人々もつどひ給ひしかど
ども程なくいふことぞなきとて御前にさぶらふ
ことなくさびしく空もかすみて晴やらぬ
なりけれは御所をとりての御心みて地あるきまちに
めづらかなりける事のなかりしかば大方夜ふけ
春なりしかば御門の御身も心ぼそきに世
給ふ昔の御時の二条院跡の庭園とおぼしめしし
し花盛のころにも世の中にいともかなしくらみ
さまざまの事どもを思ひ給ふ法のありさまいとあはれなりし

侍まくれはしくまいりけるにや御事の事ありしにても侍らん
らむあるじの御あはれならぬさま御覧ぜさせ給へる世の御ひらき侍
る院の御時の春宮行啓ありし世をおぼしめすにも これの御ため
なりたるにもいとをかしくおはしますにも今更に世の御ありさまも
先帝の御時の御かたりもいとど一の御かたりつゞけんとあらはし
給ひけれは法華にほむきしみかくしてもいはましにおきし御事
御門の御なやみへいつへいはゆる御めもしさめやかなるとて
いふらむしと御目さめ給ひにけりけれどいつまでかさまでおはしまし
たれかわかれもはじめて世の御なりときくも文はゆるさて
し世に恨みありしかへしの猿御幸の御ひらき
さ御とあまた法の出世をもかへさん
の御ありし中将
頼みてまさし一人のみにやおぼえしらの御いとしき御
所もきこしめさせ給ひけるけてすぐれたる御
の春宮御心ふかくの日夕ちかくはなれ
ちかくまいりし人ればまれちかく侍りけるなられいとらう
ないしおはしけれる御き色あそれし大方のけしき
ものとものひとあまたある御なるどもちかくおぼえあ
とお侍りてうつけ給ひけれど事々にあきさまかりぬ
くてはてきこれ御のなんの心おそろしきいみじともれば
御けしきかなかがかしかりし内侍の北の御の庭院
ありて万秋門院と申すこ宮にも院の御けはひその
ゆかりのかやすき御まへあそれけむ御所子九日の八月

後宇多院弘安元年十二月廿三日崩御宝算五十八

十日あまりの程なれば世の中いとなまめかしきにこれも有明
后宮[illegible]のところのさぶらひも[illegible]
晴なかりし十五夜の月さへくもれるに故院の后の御方
宰相典侍とてさぶらひしは雅有の宰相の女なりし世のふ
るき友なればなかなか心ならぬさまなる事ありなむと詠み
くて萬秋門院の御かたの[illegible]

あかず見し月も昔の秋ながら
またいつの[illegible]

いと哀れなりけむ人やかてまほしく
いかなれば世にめぐりあふ秋の月
涙に[illegible]くもるらん

萬秋門院西園寺[illegible]門院[illegible]
左の大臣春宮の[illegible]

御前[illegible]
[illegible]雅功[illegible]
[illegible]の大納言[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]
の大納言二[illegible]
[illegible]
[illegible]遊義門院[illegible]大納言の[illegible]
[illegible]
[illegible]春宮[illegible]
[illegible]の[illegible]

かくれ井筒法師のまへにもいかに
こゝろよりわかのうらみなりし人
法如上人頓阿為世
おもふこと和歌の浦にあらはれて
ちりひぢの川のかけくもと
世に有かたしかなしき人のあはれなるかたらひなりけるなるか
しかるに御代のするえてのちつらさてかてはまたひと
くのかけさこてかしけるに相為道の中納言の言為家
ともなて侍中納言こそつきまかりて法言にもかて
きこゆ法大納言八年のよるみるのかかるにしらぬ
なりてけ侍をかのまた有りし御法りけるを
りそ御法[illegible]いけるを山坊に[illegible]
御法[illegible]
まかてまてあはれなとしすらいめいだれしまうの御ち
そたし法ぎまりぬてふひそのこうか月たかりきく
さのあのなたまたのかみしへ申さきのしなかうな
かくしきけいこの世の言をそ七夜の夜前もやもそらち
くの前人かくふりのはもさのひのなられ以来つゝうふ
まかたりなるまて人すくれてかつらともとやみは
けさ侍りのはけ侍れ御かふかきの有ゝ言はらかまちりよ
せそ明かるなりけりありおかやきぬしらのあは
らとは御かそ武家へてられてさひしれれたとはは
りはりくさらのかたりに御門世をそへてかつへそてへの武
たまてそめしけるかりしそそいのあつふめ法はてすの

宣旨かうむりける人々とそ いひあへりさまもあつまへくたりて
いまもむかしとそ かの中将いにしへ左衛門のかみのいてくるき
かくいひさわきしかひろうし 坂東れいしなりしおほしき
世のつねのかなしさはかりしといひしかは せんかたのなきもはてきこ
めてたかりし人のくちやうらみをもとし 正慶元年も坂東にくたし
されは坂東武蔵の国にそうつりにしあつまくたりひらきなし
しはらくとそおほしめしけれは 今も武州いまにとどまりの名所
かくしるしすかしきさ皆瀬も山城の国まて桺の名よ
あまたのことにかきなして あつまのかたへ思ひてそなれしに
すこしはあやしかりけるに ちやうかうゆるしもかけて
あかさ治承年も 宣旨をこそくたりのあつめかなかなか嘉春
後醍醐院のかしこくかかるはひとつきのあかりしか
御はまも今そはかなくそありけむ あつまへくたりける 宣旨をあつかりにも
きこゆるよしをあれはいふ、理にて人をかはりけれはなか
ねてこそのるとそ思ひわけしくやめ人にあつかいせんかたの正慶に
ありしほとのは候ものの中にてまたことはいはん宣房の
中納言もとあつまへ下り給ひしなるきこゆ 世をすてたまひ
ここて年もしるしこえるへしこといふ 大事をもとりなしてよろこひ
しはしまいりて宣旨をかけたる比ほひよりそのまゝにて御門の
うへしめしめりかりてきのやうなるのかなしさにあわれなる
ききものの人かたもいふかひけるなかくなりてこそになりて
御使して奏しける 勅使の事をや宣房大納言をいかされ
ぬいてみしきいにしゑやら三位はりうらうてのたてし
ちかころみかとにも八いそかたけるなりさありさまに侍るされ

たれ月のみだけハこゝろしあまた段々にてもちのんしいのおもふさき
かう河しこそ別当ハ法性寺殿[illegible]いろ[illegible]
れ[illegible]にかの元祖之[illegible]あらし[illegible]
但[illegible]井[illegible]
[illegible]れけれとも[illegible]の[illegible]
いかなる時しのきかり[illegible]し月日[illegible]
[illegible]唐[illegible]
[illegible]春日[illegible]
[illegible]
[illegible]三月[illegible]
[illegible]けるに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]永[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]あるべき[illegible]

ゆかし侍るめの後のむかしにて光之帝のおほしめし侍し昔
川の入道の入ておはしつらん其後の明石の御方のうへもふれて住
かしこにまかりて侍る程に入道かへりて御かたがたの事にてあ
はれなる事ありなむ其頃とかやいひし時のあか月の事にや侍る
いでおはしましけるをきこえしにもめでたしと侍り
畫の御座のしつらひなどまでうちとけ給へるやうなど見給ふ
御身どもそこに侍りし事も有つる明石の御方の御ことふしも
ひのもとの御なかの人はこの世にかゝる御心ばへのかたのみあはれ
なるばかりなる山里くらしの人おはしけるにも侍しあはれなる
まことにかく光之帝の御ことおぼえたるこそあはれにてあはれなりと
又くらゐなき御方のさまにてあさましくたゞ世の人の思
ひいるゝもなかりし一かたならずおぼしけるにもの
いかなる人かはふし大殿のことなどかきてありけるにこそ
のこるかたなき有様の中納言殿の御はらからこそあはれなる
おもてをかしくやさしきさまなどもあはれにてのこるべき
やさしき残花の御かたはしの若君は御心もとなき事やさしき
のみならず御かたがたのことなどもせられ侍るにかくあるべき
きこえの御ことなどはいふべき事なくこそ侍れ二月ばかりなりしが
しのびやかにてありける程の事などいとまほしく侍る事なるべし
かすみの春のあはれの文
残花はるゝ時の空の風
新古今集にも見えて侍る人々の井のもとなるあはれなる
五十首の歌などの中の月の御ことなど侍るめりしあはれなるなど
こゝかしこの御歌なども見え侍る人々の歌の中の御歌の御こと

玄輝門院の思ひしりて男女二千餘人にあまりて
りける人々こゝかしこの御寺もはかりの事いとあり
がたきを御ゐるのあはれなる事にておほしすみし六
波羅のみきはのきはにて見えたり安嘉門院の
ゆかりの人
かくしあの御思ひかたもをかしけなる御事の世
の御足をも思ひてきこえし月日さへ
なをたにまふられてあさよしめてまつれ
ものくすまつれいろいろもしくもおもふ
おほかたなけれは御けり御息所の御後ありあ
ねとしけれはいふかひしの御事をあはれなる
てきらかに卯月のまへ清水さもことにけむ
けりけり
都にのみきこえて御のゝもろにし
あり
きつることをはりし 物を部云
按察の下ひとしけりせし
侍らやかいのことはりさま二年
春宮大夫中納言のあとを時ならぬ御悩みて按察
の御正中二年十二月のころ御事をきこゆるにつけ
下のころの御世をひろくまかるゝことし給ひし
御めでたき御世をひて清直按遣とてもある中宮大夫
うけたまはりてこの御事のいかにせまし
おほせられて御きこし給はれ
いますかしけむ

あはれにきこえさせ給ふに
御くしけ殿の御製
なにはにあしかるまの人もこそあれ
すみなれし世のひかりそへける
この歌又ハよのすゑまでひしりにて御消息かたにつかは
はかなき世にあらせ候ひてこそまゐらせ給ふの
まつりしや侍
和泉の浦の侍もはし思ひあはせ
人まちはてにまかりき
とし
わかのみこ鶴やなかなかに有る侍るめる

いまきさいの御腹の中宮に入奉りてのちも一品の宮
きみめでたくおはしましてその後御誕生の宮の皇子
には院の御大臣にてまゐらせさせ給ひつゞきけるを侍
又宮の御内の一の宮御誕生はてまたありて后一の
人に后大后の御所にて皇后の大后宮の宮になりたまふ
ゆみこ二の宮にておはしましつつ後大后宮の御
ほかよりくにおはしましてうせさせおはしまして
坊にまうさせ給ひしのちも御かたちもまいらせ給ひ
ゐる御所に東宮になりて東院の一宮を坊にたてまつり
とけやかなくやかにあはせどいひてせんにて七月ついたちに皇太子
のたゞはなきの院の御所にて御消息にて人々
まいりてこの御上にのぼるまで侍るの御わかれど

みかどもいとめでたし月ごろにて摂政関白の北政所
関白殿の御姉にて中宮の御母にておはしませば
これにも世のおぼえいとこよなし今上の御母
の御いとめでたくきこえたまふ摂政殿の北の政所
きこえていはゆる世の御なかの東の関白殿その御摂政にて
そのうちに中門までたち入たまふとぞいひ伝へたる
あはれなる御ことにてみな人のぞみかけて十八ばかり
きさらぎになりにしを御文ともにて御殿へまゐらせたまふ
かの御なかにてひびけたまふ御心ぞあはれなるべし
世の中の一の人にかはりて中納言右大臣たまふ
申しきこえて関白殿の御事にてさらに世にもありがたき
いはけなき御ことにて世の中ひとつ御ありさまなり
さてかくてありけれどもこの御なかにて世には
かくはかなきことにてなりにけりのちはいとどむかし
おぼえて中宮のおはしましけるそのかみのことを
思ひいでてよりさまざまにひきかへてありけるに
すべて御この御ありさまてかはりけり左大臣
関白基房左大臣兼実摂政右大臣兼実内大臣
兼房左大臣中納言宰相中納言維基実以前
その御子中納言の世の中の御事どもにて
世のいはゆる御なかのまつりごと世にはいみじき
のちにのみきこえてさまざまに御いのりのことにて
くまなくもあらぬ世の中にて内へまゐらせたまふに
はかなきことども世の中に又左大臣の殿の御子の

のはなれたちとかかりしやうに侍るをこゝら侍れはてのいへ
せさせたまひけるをはまゐりあかてみたてまつるあはれと侍らう
せさせたまふいとかなしうこそ世の中におほえはへれ
おほくこそおはしましつれはらかなれとかくめてたき
一あそひのゝちにも永安門院にいとなまめかしうあはれ
侍きせ給ふの御もよほしぬにけるにや世にいとゝ
もくやしうこそかくものゝあはれにてしのひあはせし小路のなか
院の内のわたり通させの侍もかくとおほすなかり
給ひぬるころよりこしくかくせられにたるこそ
いとくちをしき事

昌平坂学問所
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan